
GOD EATER ~ Let it be ~

Buddy Rich

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R \ L e t i t b e \

【Nコード】

N 8 6 3 5 J

【作者名】

B u d d y R i c h

【あらすじ】

アラガミによって退廃した地球……。
　　すぐる神なき時代に人は何を思うのか。
　　人が神になるか——神が人になるか——
　　どちらが先か、競争だ。

Hey Jude

「『このままでいよう』……か」

夜空に輝く満月を眺めながら静かに呟いた。

それは生前お父さんが度々口にしていた言葉だった。

あとで分かったことだけど、あれは「ビートルズ」という伝説のロックバンドの名曲のタイトルだった。

正確には「Let it be」。

解散間際にリリースした曲であくまで噂でしかないけど、このタイトルは既にバラバラになりかけていたメンバーにポール・マッカートニーが、もう一度やり直そう、というメッセージが所以だったらしい。

皮肉なことに解散してしまっただけ……。

でもそんなビートルズを父さんはこよなく愛していた。

アラガミが僕たちを絶滅の淵に追いやってからは、音楽は疎遠になったが……というよりもそれどころじゃなかった。

都市文明は崩壊して、ありとあらゆる建造物、生物、植物……ほとんどがアラガミに喰われたからだった。

僕はその少し後に産まれたから過去の文明はよく知らない。

数少ない文書からある程度の知識は得たけど、現実感があまりない、

のが正直なところだ。

だけど実際はまだ、残ってるものは意外とある。
身近なものだと、アラガミに喰われてあまり原型の留めていない巨大ビル群。

人の住めるところも崩壊の危険も伴うけど少数ある。

でもほぼ人は住んでいないらしいけど……。

「……寒いなあ。」

屋外で軽装なので、少し風が吹いただけでも身に堪える。

何の色気のない、薄茶色の無地のトップス、ボトムス、そして薄汚れた黒のマント。

これが一般的な服装で、オシャレな服装なのは裕福層ぐらいだ。

でも個人的にはすごく気に入ってる。オシャレという概念が元々無いのもあるけど、動きやすく機能性に優れているからだ。

このご時世アラガミから逃げ延びるのが常識で、なりふり構ってられない……。

感傷的な気分を紛らすように、周りに広がる砂漠をゆっくり見渡す。
夜の砂漠は綺麗だけど、実はかなり気温は低い。それは慣れたけど、この言い知れない感情は何だろう。

心臓がどんどん鼓動を速めるにつれて、背中に気持ち悪い汗が流れる。

嫌な予感がする……。アラガミだろうか。

得体の知れないものが迫ってくる不安が駆け巡る。すごく嫌な感じ

だ。

そして白い何かが、地平線を埋め尽くすように、向こうから枝のようにならわらとおびただしい数が向かってきた。

これは……アラガミ？そう考えてる間に気が付く。

あまりにもそれらはこちらに来るのが速い。予想していなかったため、急いでそこから逃げようとする。

しかし、背を向けて走り出すがすぐに追いつかれ、背中からどすつと突かれた。

激痛と驚きで目を見開き、確認する間もなく、力が抜けて気が付いたら、コマを飛ばしたかのように地面が目の前に広がっていた。

いつ倒れたのか、何故倒れたのかパニックになるが、横たわっている地面が生々しく赤く染まっているのを見え、ハツとなり腹が何かに貫かれていることが分かった。

それは……それは奇妙なほど強く白く光っている枝のようなものだった。

そこからは絶え間なく血が溢れていた。

段々とそこから温度が、魂が抜けていく気がした。これが死ぬってやつかな。

「何だか眠いな……。」

小さく呟くと静かに目を閉じた。

不思議と穏やかな気持ちだった……。

極東の地で

フエンリル——。

フエンリルは人類の保護と科学技術の復興を目的とし、実質的には人間社会を掌握している。元々は生物工化学に特化した穀物メジャ―資本の一企業であったが、「オラクル細胞」の発見、研究で今日に至るまで、人類をアラガミから守り、今や世界の中心にまであつた。

本部は旧北欧地域に、更に全世界に各支部を設置している。

そして、アラガミとは何か。

彼らは人類の天敵で、2050年代に発生した「オラクル細胞」が、地球上のありとあらゆる対象を捕食し急激な変化を遂げ、多様な生物体として分化したものだ。

現代兵器が全く通用しないので、極東地方に伝わる八百万の神々になぞらえて、荒神―アラガミと呼ばれるようになった。

彼らの異常な捕食により短期間で都市文明はほぼ崩壊。考えて捕食を行う一個の単細胞生物「オラクル細胞」が、集合して構成する群体である。

それぞれの細胞は、眼であれば眼らしく、牙であれば牙らしく、役割に応じて機能に特化させ、器官を形成している。

彼らの内部には「コア」と呼ばれる司令細胞群があり、群体の統制を司っていて破壊されると細胞は霧散してしまう。

やがて細胞は再集合し新たなアラガミを形成するので、事実上地球

上から駆逐不可能と言われている。

さて今は2074年。

とある大事件から3年後である。

極東支部で2名のゴッドイーターが入隊することから物語は始まる……。

「案外痛くなかったな……。」

ぼそつと小さく呟きながら俯き気味の少年は長椅子にゆっくりと腰掛ける。

「あ！……もしかして適合者？」

隣に座っていた若い女の子が少年に明るく話しかけた。

2人とも歳は同じくらいだろうか、女の子は社交的で男勝りな雰囲気、反対に少年は陰気で無愛想だ。

「……違う。おれは清掃員の面接受けに来ただけ。」

女の子を一瞥してから、無表情で話した。

すると女の子はあまりにも無愛想な態度に、少し話しかけたことに後悔した。

「あ、そうなんだ……。」

「……………」

……何こいつ。唐変木かよ？と、心の中で呟いた。
しばらくの間、沈黙が流れる。

「……………あのさ！名前何？あたし千鳥山 久遠！さっき適合検査に合格して、今日からゴッドイーターよ！」

久遠は半ばヤケクソで彼に自己紹介した。

しかし、彼は眠そうな目でどこかをぼんやりと見ているだけで、うんともすんとも言わなかった。

「……あんだねえ！人が聞いているのにその態度は……」

彼女が長椅子から急に立ち上がり、彼に向かって怒りを露わにした。
「……つかさ。たまには前見たら？」

少年が彼女の言葉を遮って、さらっと呟いた。

「……こほん。」 2人の目の前には上官と思しき女性が仁王立ちしていた。

「支部長！？いたんですか？す、すいません！」

慌てて頭を下げて、久遠は無礼を詫びた。

「……まあ、気にするな。私も何も言わなくて悪かった。それより2人とも揃っているな？」

支部長は厳粛な態度で、はっきりした声で話し始めた。

「私は雨宮ツバキ。フェンリル極東支部長を務めている。死にたくなければ私の言うことは、すべてYESと答えろ。いいな？」

有無を言わさない強い口調。なるほど、この人なら支部長に適任かもしれない。

「ってかこいつは清掃員じゃ……？」

首を傾げながら久遠がツバキに質問する。

「何を言ってる？そいつもお前と同じ新型適合者だぞ。」

眉間に皺を寄せながら淡々と答える。

「あたしと同じ新型？……この詐欺師めえ！」

突然少年に殴りかかる久遠。怒りはもつともだが、これは久遠の落ち度だ。

「普通腕輪を見れば分かるはずだ……」

久遠につかみかかれつつも、静かに彼は言った。その通り、腕輪はゴッドイーターしかつけていない。

これは、神機による捕食を防ぐために一定期間に、とある因子を静脈注射するための、謂わば神機使いの命綱だ。

よって、ただのペーパーの清掃員が着けれる代物ではなくて……

「……マジで着けてる。」

少年の腕を掴み、注視すると手首に赤い腕輪が装着されているのを確認すると、急に彼女は態度が小さくなった。

「ごめんなさい。こんなのばかりで……。続けてください……」
彼に翻弄され、少しだけ彼女は落ち込んだ。

初対面なのに、何でここまで人をコケにするの？と。そして彼女は少し俯いた。

「お前もあまり人をおちよくるな。彼女は今日からお前の大事な仲間になるんだ。職業柄、協調性を欠いているとお前いつか死ぬぞ……」

ツバキは重々しく脅し文句を口にした。

「……分かりました。反省してます。」

軽くツバキに頭を下げてから、彼は久遠に顔を向けた。

「すまない。さっきは少し度が過ぎた。」

彼は申し訳なさそうに謝った。

そんな正直な態度に久遠は驚きを隠せなかったが、笑って許してあげた。

（……。こいつ少し妙だな。）

ツバキは何となく彼の態度が腑に落ちなかったが、気を取り直して続けた。

「これからお前らはラボトリでメディカルチェックを受けてもらう。いいな？……つとその前に簡単な自己紹介しといてくれ。」

それだけ言つとツバキはさっさと立ち去った。

「じゃあ改めて私から。千鳥山 久遠 15歳です！趣味はバガラ

リー鑑賞、よろしく！」

ニツと笑い握手を求めた。

「おれは秋山 綾人。同じく15歳。趣味は……ジャズ鑑賞かな。ああ、よろしく。」

一瞬だけほんの少し穏やかな表情で、握手をしっかりと返した。

極東の地で（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

さて舞台はゲームの3年後……というわけですが、色々と状況が変化してます。

元々いたGEたちは出世していたり転属していたり……あるいは戦死を遂げています。

なのでお気に入りの人物が戦死していても泣かないでくださいね。

あとこの物語は元々いる人たちで動かしたいので、あまり新キャラは出すつもりはありません。

それにゲームを知らない人の方が多いだろうと思うのでさっと軽く読めるほうがいいと思ひまして。

今回が説明ばかりなのは出来るだけGEの世界観を理解して欲しかったからです。

そこそこ読んでおけばこの先読むのに楽かと。

それでもまだ説明不足なところがありますが、多分読むのに苦労はしません。

説明はいいから話を展開してほしい、と思う方もいるかもしれませんが、ご了承ください。

基本的に原作と設定は同じですが、相違点がいくつか出ます。

なのでこんな設定もありうるかも、という程度で軽く読んでいただけると幸いです。

興味があったら、是非原作をプレイしてみてください。

では乞うご期待。

第一部隊

「ラボラトリってここかな？」

久遠は部屋の前に立って、少し後ろにいる綾人に聞いた。

「……多分。」

そう言う綾人は少し自信が無さそうに見えた。

意を決して部屋の中に入ると……

「やあいらっしやい。予想より来るのが34秒早かったね。」

そう言う初老の男性は、メガネをかけていてとても温和で知的な雰囲気だった。

「ニアピン賞か……」

綾人はボソツと言った。

「……えーと初めまして！あなたが偏食因子を発見したあの有名なペイラー・サカキさんですか？」

よく分からないが久遠は羨望の眼差しでサカキを見ている。

「そうとも。でもよく知ってるねえ。結構僕は有名なのかな？」

この少し変わった博士は、実はとんでもなく素晴らしい功績を残している。

アラガミ技術開発統括責任者を務め、「オラクル細胞」の技術利用を可能とした「偏食因子」を発見した最大の貢献者なのだ。

「偏食因子」は様々な技術に応用利用され、今では人類を守る重要な役割を果たしている。

ちなみに神機使いはこの「偏食因子」を改良した「P53偏食因子」の摂取が義務づけられている。

「偏食因子」は「オラクル細胞」に含まれる偏食を誘導する物質であり、人体に投与すると副次効果で能力の向上が確認されている。

ちなみにフェンリル創設者の一人でもあり、彼の口振りからは全く想像出来ないほど地位が高く、それなりに権力も持っている。

「この清掃員でもあんだのこと知ってるよ……」

綾人は、そんな彼の謙虚な態度に軽く皮肉をこぼした。

「……さて本題に入ろうか。一応確認するけど君たち2人は新型神機の適合者に選抜され、見事今日から立派なゴッドイーターだ。今まででは守られる側だったけどこれからは守る側だ。しっかり責務を果たしてほしい。」

重みのある言葉をしっかりと口にしてから彼は、少し軽い口調に戻した。

「まあ堅い話はこの辺で終わりにして……。実は新型神機は旧型の総量までは及ばないけど、その半分程度は各支部に支給、生産されてあるんだ。数年前まではとても稀少だったんだけどね……。驚いたかい？」

2人は少しだけ驚いた様子だが、驚きの対象が違うようだ。

久遠は新型神機のあまりにも早い浸透の速度に対して、綾人は旧型神機という単語に対してであった。

「いくら何でも――」

「旧型？そんなの見たことないぞ……？」

久遠の言葉を遮って綾人が図々しく質問した。

消極的な彼にしては大変珍しいことだったが、他の2人は綾人の言葉に注目せざるを得なかった。

「ほ、本気で言ってるの？」

「ということは君は新型しか見たことが無いのかな？」

そんな反応を想像していなかったせいかな、質問した彼自身も焦ってしまった。

「な、何てな……嘘だよ。」

とっさに出た言葉だったがこの場を強引に流す。

「それより神機のことなんざ知ってる。早くメディカルチェックとやらを受けさせてくれ……」

と、平生の無表情に戻る。

久遠は意外な弱点を見つけたり、と内心で密かに喜んだ。

単純に神機に関して少し無知なのかと思っているが、サカキは神妙な表情で彼を観察し、何か引つかかるな……と思った。

「ああそうだったね。ごめんごめん。じゃあ早速始めようか。」

「おれは藤木コウタ。まだまだピチピチの18歳だよ！あ、隊長って呼んでくれよ！」

彼は第一部隊所属の藤木コウタ、弱冠18歳ながら部隊長を務めている。

メディカルチェックを終えた新人2人は、エントランスにてこの彼に一方的に喋られている。

「あ、君たち第一部隊配属って聞いてない？新人はまず第一部隊に配属されるのが定例なんだ。ほら、この商売って命あつてのものだねでしょ？第一部隊は生存率がいつちばん高いからそうなっちゃうの。とりあえずよろしく！」

終始身振り手振りで、大げさに表現しながら楽しそうに話す彼。この職業にはミスマッチではないか、と思うがこれが彼の持ち味であり、しっかりする所はしっかりする、といった風にスイッチの切り替えが実は上手いのだ。

「はい！よろしく願います！」

「うるせーやつ……」

活発な彼女に対して、逆に陰気な彼は思わず上司に向かって小さめに本音をこぼす。

「あ？お前何か言ったか？おい。」

当然聞こえてしまい、すぐに不機嫌な表情になり、喧嘩腰で彼に問うコウタ。

「千鳥足だっけ？お前何か隊長に聞かれてるぞ。」

怒りの矛先を久遠に向けようと涼しげな表情で話す。

「足って……！千鳥山よ！あー隊長ストップストップ！」

彼のあまりにもぞんざいな態度に、堪忍袋の緒が切れたコウタが綾人の胸ぐらを掴もうと迫ってくるのを、間に入って何とか阻止しようとする。

「ん？もしかや新人さんかな？」

助け舟を入れようと近づいて来たのは橘サクヤ。

現在は第一部隊を統括、指揮する教官だが数年前まではゴッドイーターとして活躍していた実績もある。

「ほら、コウタ隊長。部下を何でいじめてるんですか？」

続いてやって来たのはアリサ・イリーニチナ・アミエーラ。

数年前にこの極東支部に転属になったが、早くも部隊を代表するくらい多大な戦果を上げている。

ちなみに隊長は旧型だが、彼女は新人2人同様に新型である。

「……そのごめん。ちょっと最近妹が彼氏作ってイライラしててさ。」

軽く手で礼をして、コウタは正直に謝罪した。

まさかそんなしょうもない理由だとは……とサクヤとアリサは2人

で見合って口を押さえて、必死に笑いをこらえるのを苦労していた。

第一部隊（後書き）

はい、段々出てきましたレギュラーメンバー。

3年後の設定なのでコウタ君は見事に隊長に昇進してます。

あいつ偵察兵じゃ……？と思う方もいるでしょうからとりあえず説明を。

前前隊長のリンドウさんは隊員の生存率を高めに維持していましたね。

なのでツバキさんの打診でリンドウさんのように何としても生還させる隊長……ということでコウタ君が選抜されました。

彼自身戦果も能力もズバ抜けてはいませんが、仲間を思う気持ちと集中すると類い希な判断力と、洞察力を発揮することを大きく評価されたようです。

余談ですが、実は適任と言える人材が転属、戦死、引退してることも後押ししてます。

この数年間で彼はリーダーに必要な素養を育成し、発展させた、と解釈していただけると有難いです。

ちなみにソーマはというと……内緒です。

あ、サカキはゲームで支部長になってますが、僕の物語ではその後、性に合わないと思い自ら辞退し、元の席に戻ります。

サクヤさんが引退しつ教官になったことも起因してます。だから空いた席にツバキさんが……という構図です。

まあ単純にサカキが支部長……ってのはしっくりこないからですが。

あともうお気づきの方はいると思いますが、名前をよくみるとある

人物たちのごちゃ混ぜになってます。

知ってる方はニヤニヤしつつ読んでることでしょう……。

必要ないですが性格なんかもちよつと似てます。どちらかに。

さて長くなりましたがここまで読んで頂きありがとうございます。

実は今日p.tとかを見て、初めて読んでもらってるだなあと気付きました。

あの嬉しさは忘れません。あとお気に入りにしてくださった方、本当にありがとうございます。

すぐくやる気出て励みになりました。

出来るだけ毎日更新するのでチラッと覗いてもらっただけでも嬉しいです。

では乞うご期待。

初陣

綾人は手首にはめられた赤い腕輪を見つめる。

この腕輪は一度はめられたら体と融合し、二度と外すことは叶わない。

暗にこの職業を皮肉ってるのかもしれないな、と不意に思った。

正式には「P53アームドインプラント」、「P53偏食因子」を媒介とした神機への神経信号の伝達、ゴッドイーターの神経に接続された神機の「オラクル細胞」の制御を担っている。
また位置情報特定のビーコン、ターミナル接続インターフェースなど様々な機能を持っている。

彼は覚悟はしていた。この腕輪を装着することではなく、これから生死を左右する危険な戦いをしていくことを。

しかし彼の生命倫理観を至って単純だ。死んだら野となれ山となれ。

「さて、準備は出来ました？」

エントランスの出撃ゲート前で腕輪を何気なく眺めていたら、綾人の上司にあたるアリサ小尉が声をかけてきた。

肉感的だな、というのが綾人が抱いた第一印象である。

ちなみに文明が栄えている時にはモデルという職業があり、

「多分モデルやってても違和感なくね？ぐふふ」

とコウタが綾人にこっそり耳打ちするくらい容姿端麗だ。

「肌の露出は遠慮した方が……」

綾人は淡々と言ったが、実際は朴念仁の彼が目のやり場に困るくらいアリサは肌の露出が多い。

彼女は一瞬キョトンとした表情をしたがすぐに笑顔で返事をした。

「ああ……これにはちゃんとれっきとした理由があるんですよ？多少は可愛く見せたいのもありますが……。私たちゴッドイーターの衣服の繊維には「偏食因子」が練り込んであるのは知ってますね？「オラクル細胞」からの捕食を阻害する特性を持ってまして……要するにアラガミの攻撃をある程度軽減してくれます。」

長くなりそうだな、と密かに思った綾人だった。少し説明に飽きかけたのを見抜かれたのか彼女はちよつと頬を膨らませて、彼にしっかり聞いてるかを確認をしてきた。

綾人は聞いてますよ、と言つかのように何度も首を縦に振る。

「じゃあいいですか？でも何度も攻撃を受ければいつかは撤退を余儀なくさせられちゃうので、可能な限り回避行動をとります。その際迅速に動けるように軽装……とまではいきませんが制限があまりない服装が適するわけということですよ！」

アリサの熱弁を聞いて綾人はなるほど、一応理にかなっているかと率直な感想を抱いた。

「でもそれはちよつとお腹が冷えるかと……。」

アリサの軽く露出しているへそを一瞥し、納得はしたが一応気になったので口に出した。

「……若いうちにしか出来ないからですよ！一応私だって年頃の女の子ですよ！」

ちよつとむきになって返答されたので、やっぱりこんな血なまぐさ

い職業でも乙女は乙女なんだな、と感慨深く思った。

逆にそういう彼は迷彩服にミリタリーパンツ、と本格的な服装だ。都市迷彩なので多少は色気があることに注目してほしい。

ちなみに支給された服がそれだったからである。

「えつと千鳥山準備完了しました！アリサ小尉、初のミッションですがどうかよろしくお願いします！」

久遠の服装はあまり派手はないが、自分によく似合う格好を心得ているのかなかオシャレだ。それと相まって非常に初々しい。

「うつし、みんな揃ったかい？じゃあブリーフィングを始めるよ！」
近くのエレベーターから丁度下りてきたコウタがこちらに向かい、元氣よく言った。

そしてブリーフィングを終えた4人はミッション遂行のため、目的地である「贖罪の街」にヘリで移動している。

今回のミッションは、最近はややく鎮圧しかけているノヴァの残留触手による影響のアラガミの活発化の偵察、及び駆逐だ。

とは言っても出現が確認されているのは小型アラガミだけで、新兵を育成するうってつけの任務である。

「それにしても……旧型がおれだけってのも何か時代を感じるよ。」
向かいと横に座る3人を見つつ寂しそうにコウタは言った。

「たくさん量産されてますけど実際は適合者が少なくて実用的ではないみたいですよ。」

コウタをなだめるようにさらっと言うアリサ。

「でもコウタ隊長のアサルトってすごく年季入ってて歴戦の猛者って感じですよー！」

久遠が言うようにコウタ遠距離型神機アサルトは、多少古くささを感じさせるが実に高性能だ。

前の神機使いがとても優秀であることもそうだが、コウタが自分のスタイルに合わせて細かくカスタマイズしていることが一番の要因だろう。

「そろそろ目的地に到着する。至急着陸の準備をしてくれ。」

機長のアナウンスで4人は世間話をやめて、それぞれ準備を始める。

遂に実戦だ……と新人2人には若干緊張の色が伺える。

こんなおれでも緊張はするんだな、と綾人はこっそり自嘲気味に笑った。

久遠に至ってはシミュレーションを思い出せ……思い出せ、と呪文のように心の中で唱え冷静になろうと必死だ。

そんな2人を見かねてコウタは緊張をほぐしてやろうと軽口を叩く。

「大丈夫！別にいきなりアラガミを倒せるとは思ってないし、君たちがすべきことは生き残ること……みつともなくていいから危ないと思っただけに逃げていい。それさえ守ればあとは万事何とかなるって！」

そんな言葉に2人は少し緊張が和らいだ。今まで背負っていた重荷が急に無くなったかのように。

「ふふ、まるでリンドウさんみたいですね。隊長殿？」

リンドウさん、という懐かしい響きが、自分の言葉でありながらアリサの中に心地よく染み入った。

「茶化すなよ。憧れの人なんだ、ちょっとくらい似てきてもおかしくないだろ？」

そんなコウタもどこか懐かしさに浸っていて穏やかな表情を浮かべていた。

「——離陸するぞ！」

機長が叫ぶと離陸の衝撃が機内に伝わり、4人は少し体が揺さぶられる。

そして感傷に浸る暇もなくに一斉に外に飛び出した。

「戦闘開始……。」

誰にも聞こえないように綾人は呟いた。

「アリサは前衛！綾人はアリサのサポートを頼む！久遠はおれと一緒に後衛で援護射撃だ！」

コウタは人が変わったかのように素早く指示し、チームを統率する。

各々はそれぞれ返事をし、与えられた役割を果たそうと努める。

しつかり陣形を整え、報告にあつたポイントまで静かに素早く移動した。

アラガミに荒らされ無残な姿になった教会の横を通り過ぎたとき目標と遭遇した。

「オウガテイルが4体……。」

特に感情は込めずに綾人は呟いた。

「綾人の言つとおり報告と同じ4体だ！まずはこいつらを分断するぞ！アリサ！」

前方を走るアリサに向かってコウタは叫んだ。

同時に彼らが気づき、こちらに対して威嚇行動をしてきた。

オウガテイルは鬼のような顔面に、尻尾があり腕はなく足が二本の小型アラガミだ。

単体だとそれほど脅威ではないが集団になると能力を発揮し、充分な脅威になる。

「了解です！……それっ！」

アリサは腕をふりかぶりスタングレネードを地面にぶつける。

すると、テイルたちは一瞬で視界が真っ白になり視力を奪われた。

アリサはひるんでいる隙に素早く一番手前のテイルの懷に潜り込みつつ剣形態に切り替え、目に止まらぬ剣戟を浴びせた。

そして素早く身を後ろに後退させた途端、コウタの銃撃が容赦なく続く。

すると標的は我慢しきれずに地面へ倒れた。

もちろんまだ攻撃は終わらない。

コウタが銃撃している間に、アリサはすぐさま銃形態にし近くにいたテイルに照準を合わせ、連射する。

久遠は2人の迅速な攻撃に少し意表を突かれながらも遅れてコウタの支援をする。

綾人は勝手に囃役を買って出て、テイルの群れの後方へ回っている。3人の執拗な攻撃により1体を葬り去り、違うテイルが倒れたところ

るで彼らの視力は回復した。

それを見た綾人は剣形態で攻撃を受けていない後方の2体に切りかかり、素早くステップで後退しそのまま背を向けて走る。

そしてその2体は綾人を敵だとみなし後を追った。

「あいつ……案外慣れてるな。よし、綾人！そいつらを引きつける！こつちが片付け次第そちに行く！それまで絶対に死ぬなよ！」

綾人が勝手に囷役になったことに少し動揺したが、すぐに冷静になり的確に指示をした。

「……一人でもやってみせる。」

綾人は返事代わりに呟いた。元々彼は囷役を買って出るつもりはなかったのだ。

「私がやるつもりだったのに……。結構機転が利きますね綾人くん。」

「

アリサも少し驚いていたが、素直に彼のとつさの行動を誉めていた。

「だ、大丈夫ですかねあいつ？」

久遠は彼の突飛な行動にかなり動揺していた。

「あいつの動きに迷いはなかったし、多分死にはしないよ！」

コウタが言うと同時に倒れたテイルが立ち上がった。

3人が素早く射撃を加えると、瀕死だったのか断末魔をあげて今度こそ倒した。

「さあ早く綾人を追うぞ！」

コウタは崩れかけていた陣形を整えると、号令を出した。

「この辺でいいか……。」

しばらく走り続けた綾人は廃墟の入口で突然止まった。

後ろを振り返ると2頭のテイルが血気盛んに迫ってきていた。

それを確認してから彼はバスターを構えて強烈な溜め切りが出来るように準備した。

「アラガミは……絶対に許さない。」

テイルたちが目の前まで肉薄し、綾人に飛びかかるうとした瞬間に彼は目を大きく見開き、力強いチャージクラッシュを「クレイモア」という大刀で2体まとめてお見舞いする。

神機の刃はアラガミの体を喰い裂き、地面まで到達した。

惚れ惚れするほど見事な一刀両断。

たった一撃で力尽きたアラガミは断末魔を上げることなく地面に伏した。

「……結構やれば出来るもんだな。」

満足そうな表情で静かに呟くと、コウタたちがこちらへ急いで向かってくるのが見えた。

「綾人！無事か？……っってお前すごいな！初戦で2体も倒しやがった！」

コウタは表面上驚き褒め称えてるようにしたが、囧役に回ったときに感じていた。

綾人は腹の中に一物抱えてるということを。

普通はあんな度胸がいることは出来るわけがない、最初から1人で戦うつもりだった、と。

恐らくアリサもそうだろう、とアイコンタクトを取った。

「本当は何もしないんじゃないかなって思ってたけど大奮闘じゃないですか！」

と彼女も上手くごまかしていた。

「あんた意外とやるねー。ちょっと見直したよ！」

逆に久遠は心から彼の雄姿を誉めていた。

しかし久遠もなかなか冷静沈着に対応出来ていたので、2人とも非凡な才能を秘めている。

コウタは心のどこかで思った。

この新人たちは新人らしくないな、と。

初陣（後書き）

今回は戦闘編ということで二倍ほどかかせていただきました。

もちろん疲れも二倍です……。

ですが一番楽しんで書けたと思います。

さてゲーム本編の主人公ですがこの物語に………出ます。

一応結構重要な役で出てきます。

ゲームでは空気でしたが、ここでは空気じゃないので注意を。

さて神機の種類が書いてたり書いてなかったりしてますね……。
これから明らかにするのですね。

あと名前ですが……。

一気に説明すると、あまり印象に残らないのでは、と思ひまして。

これからちよこちよこ出していくので安心してください。

さてここまで読んでいただきありがとうございます。

少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

では……期待。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8635j/>

GOD EATER ~ Let it be ~

2010年10月10日16時36分発行